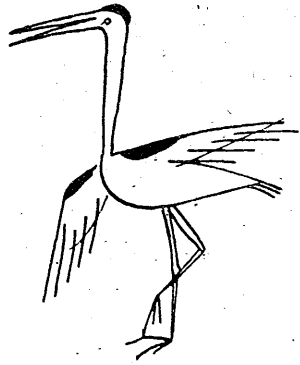


K	378
5	1
	+

こいけおのぼとこ

四

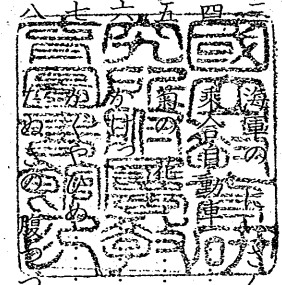


27
昔の
うた

うたはぶんし

もくろく

一	富士山	三
二	早鳥	四
三	海軍の 乗合船	八
四	東洋の 海軍	十一
五	東洋の 海軍	十五
六	東洋の 海軍	十八
七	東洋の 海軍	二十一
八	東洋の 海軍	二十四
九	金の牛	二十六
十	満洲の冬	二十九
十一	鏡	三十二
十二	神だな	三十五
十三	新年	三十八
十四	いうびん	三十九
十五	にいさんの入營	四十三
十六	雪の日	四十六
十七	白兔	四十八
十八	たこあげ	五十三
十九	豆まき	五十六
二十	金しくんしやう	六十
二十一	病院の兵たいさん	六十一
二十二	支那の子ども	六十四
二十三	おひな様	六十七
二十四	北風と南風	六十八
二十五	羽衣	七十四



一 富士山

ど	こ	か	ら	見	て	も	、	い	い	つ	見	て	も	、
富	士	の	お	山	は	美	し	い	い	。つ	見	て	も	、
す	そ	引	く	は	て	の	松	原	に	、				
太	平	洋	の	波	が	立	つ	。						
日	本	一	の	こ	の	山	を	、						
世	界	の	人	が	あ	ふ	ぎ	見	る	。				

(一) 富士山
 (二) あたまを雲の上に出し、
 四方の山を見おろして、

かみなりさまを下に聞く、
富士は日本一の山。

青空高くそびえ立ち、
からだに雪のきものきて、
かすみのすそを遠く引く、
富士は日本一の山。

二 早鳥

(一) どうも困ったものだ。

「お米が半分もできない。」
「なんとかならないものかなあ。」
「しかたがない。この木を切ることにしよう。」
「こんな大きな木を切つていいものでせうか。」
「でもこの木は、切るよりほかにみちがあるまい。」
「くりぬいて、舟を作るがよい。」
「えいや、えいや。」
「なんといい早い舟だらう。」
「ふしぎだ、ふしぎだ。」
「いや、ふしぎでも何でもなし。あの勢のよいく」

すの木で、作った舟だ、勢のよいのがあたりまへさ。考へてみれば、このすばらしい舟になるために、あの木は、ぐんぐんのびたのかもしれない。鳥のやうに早い舟だから、早鳥といふ名をつけよう。

(三)

ど	い	午
う	ふ	後
も	村	に
困	々	なる
つ	が	ると
た		ど
も	日	
の	か	東
だ	げ	が
だ	に	は
お	な	の
米	り	何
が	ま	十
半	す	と

(三)

この木を切ることにしよう
早鳥といふ名をつけよう

方	米	と	鳥	ま	大	分
へ	や	い	の	し	勢	も
た		ふ	や	た	の	で
び	麥	名	う		大	き
た	や	を	に		工	な
び		つ	早		を	い
通	豆	け	い		集	れ
ひ	を	よ	舟		めて	
ま	つ	う	だ		て	
し	ん		か			
た	で		ら		舟	
					を	
	都		早		作	
	の		鳥		り	

「どうするかといふことになりました
せんどうたちも見てゐる人もいひました

「かいをそろへて
考へてみれば

三 海軍のにいさん

(一) 「よくかへつて来ましたね。」

「ほんたうにしばらくでしたね。まあ、一つおあがり。
勇、大きくなったね。いい子になった。
ほくも大きくなったら、海軍だよ、にいさん。」

「それはいい。大ぢやうぶなれるよ。」

「かはいらしい。水兵さんだぞ。」

「大日本、その次は何と読むの、にいさん。」

「大日本帝國。」

「あ、わかった、大日本帝國海軍。」

「さうだ、よく讀めたね。」

「軍かんと、いっても、加賀などは、動くひかうぢやう
のやうなものですよ。」

「ほう、ほう。」

(二) おかあさんは、頭から手ぬぐひ

の	加	み	ば	さ	に	ま	を
や	賀	ま	う	う	い	し	取
う	な	し	し	に	さ	た	り
な	ど	た	に	見	ん	ね	な
も	は	金	え	は	ど	ら	が
の	犬	で	ま	色	お	つ	よ
で	動	日	書	し	が	つ	く
す	く	本	い	た	黒	し	か
よ	ひ	帝	て	あ	く	や	か
か	う	國	あ	る	な	い	へ
	ぢ	海	る	字	な	ま	つ
	や	軍	を	を	つ	ま	つ
	う		を	を	て	し	て
			讀		強	た	來

(三)

うれしさうにおっしゃいました
強さうに見えました

本を讀んでみると

うらの島にみたおかあさん
聞いていらっしゃいました

四 乗合自動車

- (一) 1 乗合自動車に乗って出かけました。
- 2 松並木を通りぬけるとたんぼでは、稲をさかんに
かり取つてあました。
- 3 牛の引いてある車をおひこしました。
- 4 サ村の入口で、中學校の生徒さんが二人乗り

こみました。

5 道がだんだんのぼりになりました。

6 たうげに来た時、山と山との間から海が見えました。

7 たうげをおりたところで、女の子が一人乗りました。

8 川へ来ました。橋をわたりました。

9 ホ町に近いところで、どこかのおばあさんが乗りました。おばあさんは、出征する孫が汽車で通るので、ホ町まで見送りに行くのださう

です。

10 道のまん中で、にはとりが急さをひろつてゐました。

11 ホ町にはいって、いっぴんきよくの前で止りました。

(二)

ひ	生	ま	た
ま	徒	し	ん
し	さ	た	ぼ
た	ん	。	で
。	が		は
	海		稻
	が		を
	見		か
	え		り
	る		取
	。		つ
	と		て
	い		ぬ

乗	ま	出	ん	席	の	ふ	ふ	友
合	す	征	で	を	旗	ろ	り	だ
自	し	す	腰	を	が	し	ま	ち
動		る	を	あ	の	き	し	が
車		孫	か	け	の	の	た	並
は		が	け	と	い	結	。	ん
ホ		ま	ま	て	び			で
町		今	し	お	め			
に		日	た	ば	ま	か		元
つ		汽	。	あ	し	ら		氣
き		車		さ	た			よ
ま		で		ん	。	日		く
し		通		は		の		手
た		り		喜		丸		を

(三)

海が見える
一本のくすの木が生えました

答へますと
そろへてこぎました

ありがたう
ありがたくいただきます

五 菊の花

(一)

は	秋
れ	空
わ	高
た	く
り	

ご	菊		明	お	天			菊	
も	は	あ	治	ぢ	皇		明	の	
ん	た	が	の	い	陛		治	花	
し	ふ	め	み	さ	下		節	咲	
や	と	ま	か	ま	の		。	く	
う	い	せ	ど						
		う	を						
			。						

(二) 明治節にしたことを話してごらんなさい。

	明	お	天					私	
さ	治	ぢ	皇		す	た		ち	
さ	の	い	陛		き	な		の	
げ	み	さ	下			花			
ま	か	ま	の			。			
せ	ど								
う	に								
。									

六 かけっこ

(一)

走	負	二	用	白
り	け	人	意	い
ま	る	が	と	線
し	も	ぼ	と	に
た	の	く	先	そ
。	か	を	生	つ
。	。	追	の	て
。	一	ひ	聲	並
。	生	こ	。	び
。	け	し	。	ま
。	ん	ま	。	し
。	め	し	。	た
。	い	た	。	。
。	に	。	。	。

(二)

太郎「おとうさん、あしたはぼくたちのうん動くわいですよ。」
 父「さうか、お天気だといいがね。」

太郎「おとうさん、大ぢやうぶですよ。さつきラジオ

で、あしたははれたといひました。」

父「それはいいね。」

太郎「おとうさんも見に来て下さいね。」

父「困ったな。あしたはだいなようじで行かない。おかあさんに行ってもらひませう。」

あしたのうん動くわいで、おまへは何をするね。」

太郎「いうぎとかけっこをします。」

父「早く走れるかな。」

太郎「一生けんめいで走るつもりです。」

父「よろしい。負けてもよいから、しまひまで走るのですよ。」

本郎「わかりました。しまひまで一生けんめいで走ります。」

夕やけ小やけ

あした天気になあれ。」

(三)

二人がぼくを追 いこしました。

ごちやごちやになつて聞 へます。

よ そ うか。

手をたたいて笑つて い るやうです。

(四)

うん動くわいにしたことを話してごらんなさい。

七 かがやひめ

(一)

か	が	む	育	小	竹
ぐ	あ	す	て	さ	の
や	り	こ	ま	い	中
ひ	ま	の	し	の	か
め	し	嫁	た	で	ら
は	た	に	。		女
あ	。	し		か	の
る		た		ご	子
晩		い		の	が
		。		中	出
月		と		へ	ま
を		い		入	し
眺		ふ		れ	た
め		人		て	。

お	に	持	と	と	安	う	お	月	て
ぢ	な	つ	の		心	ご	別	の	泣
い	り	た	さ	お	し	ざ	れ	世	き
さ	ま	け	ま	ぢ	て	い	す	界	ま
ん	し	ら	に	い		ま	る	か	し
は	た	い	申	さ	泣	す	の	ら	た
			た	し	ん	く	が	迎	
入		ち	ま	が	こ			へ	
口		が	す	い	ど		何	に	
に			と	ひ	は		よ	り	
立		守		ま	お		り	め	
っ		る	弓	し	や		も	り	
て		こ	矢	た	め		悲	し	
番		と	を				し	す	

(二)

（ざるやかごを作つてみました）
 小さな女の子がみました
 根もとの光つてゐる竹
 かうしてゐる間に

か	り	の	ご	天	を
ぐ	ま	世	恩	人	し
や	せ	界	は	が	ま
ひ	う	か	け	お	し
め		ら	つ	り	た
は			し	て	
天		お	て	來	
へ		二	忘	ま	
の		人	れ	し	
ぼ		を	ま	た	
り		拜	せ		
ま		ん	ん		
し		で			
た		を	月		

かぐやひめをだいてをります
番をしてをります

かへらなければなりません
お二人を拜んでをりませう

八 たぬきの 腹つづみ

(一)

ぼ	お	み	ざ
ん	山	ん	あ
ぼ	の	な	さ
こ	上	で	あ
あ	で	つ	
ひ	は	づ	集
づ	親	み	れ
の	だ	の	
腹	ぬ	打	月
つ	き	ち	が
づ		く	出
み		ら	た
		だ	
		し	

(二) しようしようしようじやうじ

しようじやうじの庭は

つんつん月夜だ

みんな出て来い 来い 来い

ぼくらの友だちや

ぼんぼこぼんのぼん

負けるな 負けるな

をしゃうさんに負けるな

来い、来い、来い、来い、来い、

みんな出て来い 来い 来い。

しよしよしよしよじやうじ

しよじやうじのはきは

つんつん月夜だ、花ざかり。

ぼくらはうかれて

ぼんぼこぼんのぼん。

九 金の牛

(一)

海の中の島に、一匹の金の牛が

た	金	し	と	て	か	四	み
。	の	た	思	る	ふ	方	ま
こ	牛	。	っ	ま	の	を	し
れ	は		て	し	島	見	た
は	海		た	。	に	わ	。
満	に		海	。	。	た	岩
洲	沈		の	そ	草	し	の
の	ん		中	の	が	ま	上
話	で		へ	草	一	し	に
で	し		と	を	め	た	あ
す	ま		び	た	ん	。	が
。	ひ		こ	べ	に	海	っ
	ま		み	よ	生	の	て
	し		ま	う	え	向	、

(二)

おなががすいた、草をたべようと思って、

歩きました、この島には、一本

の草も生えてあませんでした。

はひとりごとをいひました。

ふしぎに今まですいてあたおなかが、急に

なりました。

ここから見るだけ、おなかがいっばいにな

るのだ、あの島の草を

べたら、どんなにだらう。

(三) 草をたべようと思って

守らせることにしよう

なんとおいしさうな草だらう

なんといふ早い舟だらう

島が見えました

草が一めんに生えてあました

十 満洲の冬

(一) まどガラス一めん、まつ白にこぼつたのはきれいなものです。

じゆ氷といふのはもつときれいです。

日本の子どもたちは、元氣よくスケートをします。

満洲人の子どもは、木でこしらへたこまをまはします。

(二)

寒	白	羽	す	書	え	木	す
さ	に	を	。	に	ま	の	。
の	こ	ひ	氷	な	す	枝	
た	ほ	ろ	の	る	。	が	
め	り	げ	上	と		す	
に	ま	た	に	が		っ	
が	す	や	指	ラ		か	
ラ	。	う	で	ス		り	
ス	白	な	字	の		氷	
一	く	の	を	上		で	
め	じ	が	書	の		包	
ん	や	あ	き	氷		ま	
ま	く	り	ま	が		れ	
っ	が	ま	す	消		ま	

(三)

木の枝といふ枝。おもしろくておもしろくてたまりません。寒ければ寒いほど。

満	は	す	細	の
洲	ス	。	い	腹
に	ケ		棒	を
住	ー		の	た
ん	ト		先	た
で	場		に	き
ゐ	へ		つ	ま
る	行		け	す
日	っ		た	。
本	て		ひ	
の	す		も	
子	べ		で	
ど	り		こ	
も	ま		ま	

こんなにきれいなにはかけないでせう
 お二人を拜んでをりませう
 明治のみかどをあがめませう

十一 鏡

(一) 花子さんは鏡で日の光を受けて、ねえさんの顔へあてました。

勇さんはをんどりに鏡を見せました。をんどりは鏡にうつる自分のかけをめぐけて、とびついで来ました。

(二)

鏡	窓	を	ま	孝	ひ
で	に	ん	し	行	さ
日	あ	ど	た	な	の
の	て	り	は	娘	く
光	て	は	、	が	だ
を	み	首	の	あ	さ
受	ま	毛	を	り	っ
け	し	を	さ	ま	あ
て	た	を	か	し	た
、	。	を	か	た	。
二		さ	か	。	。
か		か	立	お	と
い		て	あ	か	を
の		て	あ	思	鏡

孝行な娘がありました。おかあさんのくださった鏡にうつる自分のすがたを見て、「おかあさん」といひました。

で
した。

(三) もらへるのかと思つて。

すべれるやうになります。

こんなにかいにはかけないでせう。

(四) 花子さん 、日のあたるところ 、鏡 持つ

て出ました。

「ほかのをんどりと思つて るのだな」と、勇さ

んは思 ました。

娘 思 ず、「おかあさん」とい ました。

十二 神だな

(一) もうすぐお正月なので、 は、神だ

なをおかざりになりました。

新しいしめなはをはったり、さかきをあげたり

なさいました。

小さい三方に、白い紙とうら白をしいて、鏡餅を

のせてお供へになりました。おみきもお供へに

なりました。

それから、おざしきの床の間にも、鏡餅をおかざり
になりました。

は

「さあ、これでいつお正月が来てもいいぞ。
とおっしゃいました。」

(二)

小	か	新	り	お
さ	き	し	に	ぢ
い	を	い	な	い
三	あ	し	り	さ
方	げ	め	ま	ん
に	た	な	し	は
	り	は	た	
白	な	を		神
い	さ	は		だ
紙	い	つ		な
と	ま	た		を
う	し	り		お
ら	た			か
白		さ		ざ

つ	れ	白	新	み	夕	お	お	に	を
た	い	の	し	ん	方	か	ざ	な	し
や	に	葉	い	な		ざ	し	り	い
う	見		し	で	神	り	き	ま	て
な	え	何	め	拜	だ	に	の	し	
氣	て	も	な	み	な	り	床	た	鏡
が		か	は	ま	に	り	の		餅
し	も	も		し	あ	ま	間		を
ま	う	さ	白	た	か	し	に		の
し	お	つ	い		り	た	も		せ
た	正	ば	紙		を				て
	月	り			あ		鏡		お
	に	と	う		げ		餅		供
	な	き	ら		て		を		へ

十三 新年

(一)

	上	書		君	お
新	手	き		が	宮
年	に	ぞ		年	へ
お	で	め		お	ま
め	き	の		め	み
で	て	字		で	つ
た		は		た	て
う		昭		う	、
ご		和		ご	学
ざ		の		ざ	校
い		光		い	へ
ま		、		ま	行
す				す	つ
。				。	て

(二)

おめでたうございます
 ありがとうございます
 花子さんがみます
 本を讀んでみます

(三)

新年にしたことを話してごらん下さい。

十四 いうびん

(一)

四	分	花
銭	れ	子
の	て	さ
切	す	ん
手	わ	と
を	り	春
一	ま	枝
枚	し	さ
く	た	ん
だ	。	は
さ		、
い		兩
。		方
と		に

花	あ	書
子	し	い
さ	た	て
ん	か	あ
が	ら	り
い	学	ま
ひ	校	し
ま	が	た
し	始	。
た	り	
。	ま	
	す	
	。	
	と	

(二) 一郎「すす木さん、いうびん。」

花子「はい、ありがたう。」

一郎「林さん、いうびん。」

春枝「どうもありがたう。」

花子「新年おめでたうございます。」

春枝「新年おめでたうございます。」

花子「あら、二人ともおんなじですね。」

一郎「もうありませんか。あつたら早く出してください。」

花子「こんどは私が先に書きますから、春枝さん、ごへんじをください。」

一郎さん、四銭の切手を一枚ください。」

一郎「はい、四銭の切手を一枚。」

花子「ありがたう。」

一郎「林さん、いうびん。」

春枝「何と書いてあるかしら。」

あしたから学校が始りますが、また、いっしょに

行きますせう。朝さそつてください。

「一郎」すず木さん、いうびん。

「花子」ありがたう。どんなごへんじかしら。

お手紙をくださつて、ありがたうございます。

あしたの朝きつとおさそひしますから、待って

めてください。

「一郎」ぼくも学校へ行きたいなあ。

(三) いつしよに行きました。

いつしよに行きます。

いつしよに行きますせう。

十五 にいさんの入營

(一)

山	た	廣	し	門	來	み	青
田	。	い	た	を	ま	ん	年
武		庭	。	は	し	な	學
。		に		い	た	に	校
と		立		る	。	送	の
		札		と		ら	服
に		が		ゑ		れ	を
い		立		い		て	着
さ		て		兵		兵	た
ん		て		所		營	に
の		あ		が		の	い
名		り		あ		門	さ
を		ま		り		ま	ん
呼		し		ま		で	は

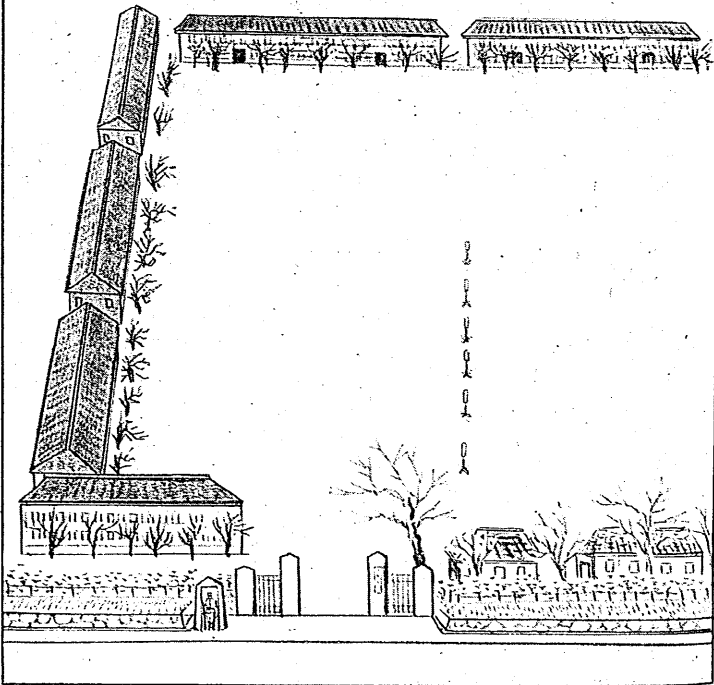
び	庭	す	お	み
ま	の	。	と	ま
した	向		う	した
。	か		さん	。
	ふ		と	
	に		私	
	兵		は	
	舎		休	
	が		ん	
	立		で	
	っ		待	
	て		っ	
	。		て	
	み		ま	

(二) 門の中へはいりました
門をはいって来ると

「はい。」と答へました
見ちがへるほど

(三) 兵營の門をはいると、広い兵所があります。

広い兵所のそばにめんくわい所があります。
広い庭に立札が立ってあります。
向かふに兵舎があります。



十六 雪の日

(一)

山	鳥	鳥	き
は	が	の	、
大	急	か	や
雪	い	ん	す
、	で	太	ま
日	か	は	う
は	へ	寒	よ
く	つ	か	。
れ	た	ら	と
る	よ	う	親
。	。	。	す
			ず
			め
			。

(二)

ちらちらと雪がふる。
さらさらさらと雪の音。

(三)

ちらちらと雪がふつてゐます。
すずめのおとうさんと子どもが、こんなお話を

してゐます。

「山の方は大雪だし、日はくれるし。さつき

鳥のかん太さんが大急ぎでかへつて行った。

さぞ寒いことだらう。

さ、やすまうよ。」

かう おとうさんすずめがいひました。すると、子

すずめが、

「やすみませう。今夜は雪がだいぶつもるでせ

う。」

と、いひました。

まもなくすずめの親子はねむってしまひました。
外では雪がさらさらとふりつついてゐます。

十七 白兔

(一)

た	か	ち	君	つ	白
。	ぞ	が	の	て	兔
	へ	多	仲	み	が
	な	い	間	た	
	が	か	と	い	鳥
	ら		ぼ	と	か
		く	く	思	ら
	渡	ら	の	ひ	向
	つ	べ	仲	ま	か
	て	て	間	し	ふ
	行	み	と	た	の
	き	よ		。	陸
	ま	う	ど		へ
	し	。	つ		行

(二)

白兔君の仲間とぼくの仲間とどつちが多いか。
くらべてみようではないか。

「わにぎめ」それはおもしろからう。」

白兔君の仲間はずゐぶん多いな。ぼくらの方が
負けるかもしれない。ぼくが君らのせなか
の上をかぞへながらとんで行くから向か

ふの陸まで並んでみたまへ。」

わにぎめ「それではみんな並ぶから渡ってみたまへ。」

白兔「一つ、二つ、三つ、四つ……。」

君らはうまくたまされたな。ぼくはここへ

渡つて来たかったのだ。あははは。」

わにぎめ「よくもたましたな。よし、おまへのからだの

毛をむしり取つてやらう。」

白兔「ああ、痛い、痛い。」

大勢の神様「おまへ、なぜ泣いてゐるのか。」

白兔「わにぎめが、私のからだの毛をみんなむしり

取つてしまつたからです。」

大勢の神様「それなら、海の水をあびて、ねてゐるがよい。」

白兔「痛い、痛い。海の水をあびたので、いつそう

痛みがひどくなつた。」

大國主の「おまへ、なぜ泣いてゐるのか。」

白兔「大勢の神様が海の水をあびて、ねてゐるが

よいとおっしゃつたので、そのとほりにする

と、痛みがいつそうひどくなつて、どうにも

たまらなくなつたのです。」

大國主の「かはいさうに。早く川の水でからだを洗つ

て、がまのほをしいて、その上にころがるがよい。
 白兔「おかげですっかりなほりました。あなたは
 おなげけ深い。おかたですから、今は重い。ふ
 くらをせおつて、いらっしゃつても、のちには
 きつとおしあはせにおなりでせう。」

(三) 陸へ行つてみたいと思いました。
 くらべてみやうではないか。
 それはおもしろかろう。
 陸へあがろうといふ時。

「あははは。」と笑いました。
 水をあびて、ねているがよい。
 重い。ふくらをせおつてあらっしゃいます。

十八 たこあげ

(一) をぢさんに作つて、いただいたたこを、あげて遊び
 ました。
 みんなが、「へんなたこだ。」といつて、笑ひました。
 次郎にたこを持たせてあげました。空で二三べ
 んまはつて、落ちました。

二度めにはあがりましたが、左の方へかたむきま
す。

三度めにあげた時は、まっすぐにあがりました。

高い空に小さく見えて、すわったやうに動きま
せん。

みんなが、

「よくあがつてゐるな。」

といひました。

(二)

毎
日
雪
が
降
つ
た
り
雨
が
降
つ
た
り

あ	下	う	を	し	し	三	し	し
が	糸	に	ぢ	た	か	ち	た	て
り	を	、	さ	。	な	や	。	、
ま	少	た	ん		い	ん		た
し	し	こ	に		ぢ	は		こ
た	つ	の	教		や	、		が
。	め	糸	へ		な	な		あ
	ま	め	て		い	ん		げ
	し	を	い		か	だ		ら
	た	な	た		。	、		れ
	。	ほ	だ		と	骨		ま
	今	し	い		い	が		せ
	度	て	た		ひ	二		ん
	は	、	や		ま	本		で

(三)

笑ひました
いひました
落ちてしまひました
あげたいと思ひました

十九 豆まき

(一)

ま	弟	げ	福
し	が	て	は
た	大	豆	内
。	さ	を	鬼
み	わ	ま	は
ん	ぎ	ま	外
な	を	ま	。
で	し	し	と
豆	て	た	聲
を	。	。	を
年	豆		は
の	を		り
數	拾		あ
だ	ひ		

け	た	べ	ま	し	た	。													
---	---	---	---	---	---	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(二)

太郎「今日は節分で、豆まきの日ですね。」
 父「さうだ、太郎、今年からおまへがまくのだ。」
 母「神だになにお供へしてからまきませう。」
 太郎「もうどこかで、福は内、鬼は外と、いつてゐますよ。」
 父「うちでもそろそろ始めるかね。」
 太郎「少しきまりがわるいなあ。」
 よし、やらう。福は内、鬼は外。」

弟妹 「おもしろい、おもしろい。」

太郎 「福は内、鬼は外。」

妹 「にいさん、お上手ね。」

太郎 「鬼は内、福は外。」

みんな 「あはははは。」

母 「おしまひに えんがはへ 出て おまきなさい。」

太郎 「鬼は外、鬼は外。」

母 「鬼が はないやうに 雨戸をしめませう。」

父 「それでは、みんなで、豆を年の 数だけ 数へて たべる ことに しよう。」

(三)

弟妹太郎 「うれしい、うれしい。」

が、おっしゃいました。

は、神だなお供へになりました。

が、神だから、ますをおろして

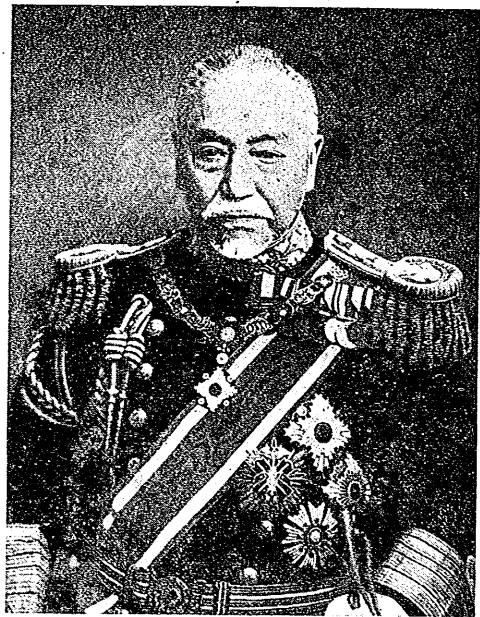
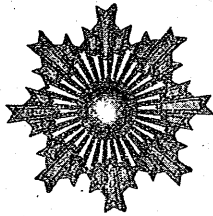
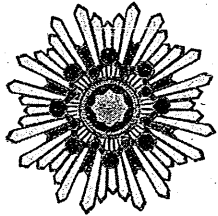
くださいました。

が、雨戸をぴしゃりとおしめに

なりました。

二十 金しくんしゃう

(一)



(二)

昔、神武天皇のお弓に止った

二十一 病院の兵たいさん

(一)

花をさしあげました。

学校のことや、うちのことなど、いろいろお話しまし

はづかしがらないで、いうぎをしました。

(二)

兵	行	わ	花	咲	ゐ	て	戦	お
た	き	ざ	が	い	も	見	争	話
い	ま	わ		て	ん	せ	の	を
ぎ	し	ざ	私	み	ひ	て	こ	し
ん	た	持	の	ま	く	と	と	て
の	。	っ	枕	す	だ	や	あ	げ
病		て	も	代	さ	い	ま	ま
院		來	と	り	い	。	支	せ
へ		て	で	に	い		那	う
、		く			う		の	。
ゐ		だ	今		ぎ		子	
も		さ	も		を		ど	
ん		っ	ま		し		も	
に		た	だ				の	

(三)

お手紙ありがとうございました。おきずの痛みが早く

なほるやうにといのつておりましたが、お手紙を見て安心しました。

持つて行った花が、まだ枯れないで、枕もとで、咲いてあるさうで、うれしく思ひました。

今度行つたら、いうぎをいたしませう。

戦争のことや、支那の子どものお話をしてくださいね。

(四)

大勢 らつしゃいました。

お手紙が まりました。

花が咲いて ます。

おあ する時。

二十二 支那の子ども

(一) ていねいにあいさつします。
すぐよけて通らせます。

聲をそろへて歌ひます。

店	の	ゐ	卵
も	肉	る	や
あ	を	店	、
り	ぶ	が	は
ま	ら	あ	す
す	さ	り	の
。	げ	ま	實
	て	す	な
	、	。	ど
	賣	大	を
	っ	き	、
	て	な	並
	ゐ	ぶ	べ
	る	た	て

(二)

つ	と	た	門	銃	門	を	日
き	い	ち	を	を	の	つ	本
ま	ひ	が	過	持	と	ん	の
す	ま	、	ぎ	っ	こ	で	兵
。	す	日	ま	て	ろ	來	た
車	。	本	し	番	に	ま	い
の	車	語	た	を	は	し	さ
後	の	で	。	し	兵	た	ん
押	か	兵	支	て	た	。	が
し	ち	た	那	ゐ	い		、
を	棒	い	の	ま	さ		車
し	に	さ	子	す	ん		に
ま	と	ん	ど	。	が		荷
す	り	、	も		、		物

(三) 支那の子「兵たいいさん」
ども「兵たいいさん」。

支那の子「兵たいさん。」
ども二

支那の子「兵たいさん、車を引かせてください。」
ども三

支那の子「兵たいさん、車を押させてください。」
ども四

兵たいさん「手つだつてくれるのかね。」

支那の子「ぼくがかち棒だ。」
ども一

支那の子「ぼくも。」
ども二

支那の子「ぼくも。」
ども三

支那の子「ぼくは後押しだ。」
ども四

支那の子「ぼくも後押し。」
ども五

みんな「よいしよ、よいしよ。」

支那の子「青空高く日の丸あげて。」
ども一

支那の子「青空高く日の丸あげて、ああ、美しい、日本の旗は。」
ども二

二十三 おひな様

ま	あ	あ	赤	三	笛	五
あ	な	い	人	人	や	人
	た	は	並	た	ば	ば
お	は	か	ん	い	や	や
久	一	ま	で	こ	し	し
し	番	の	次	で	は	は
い	上	官	の	に	三	三
	の	女	段	ぎ	の	の
だ	段	さ	や	の	段	段
い		ん	か			
り			な			
様						

な	あ
た	ら
ね	れ
の	ひ
花	し
も	餅
供	へ
ま	桃
せ	の
う	花
。	、

二十四 北風と南風

(一)

し	南	暖	て	う	冬
か	風	い	み	と	が
ら	は	光	た	う	終
と	、	を	お	と	に
か	雪	送	日	眠	近
し	で	る	様	づ	づ
て	も	や	が	て	く
、	氷	う	、	、	と
野	で	に	目	弱	、
や	も	な	を	い	今
山	、	り	さ	光	ま
を	か	ま	ま	を	で
暖	た	す	し	出	は
く	は	。	て	し	、

ん	し
だ	ま
ん	す
と	。
芽	す
を	る
ふ	と
い	、
て	草
來	や
ま	木
す	が
。	、
	だ

(二)

北風 びゆうびゆう、びゆうびゆう。雪が降る、あられが降る。水がこぼった。これで大ぢやうぶ。ひと休みしよう。

南風 そつと行って、北風の作った雪の山や、池の氷を、少しでもとかしてやらう。

北風 おや、南風が来たな。追ひはらつてやらう。びゆうびゆう。

南風「これはたまらない。だが、しんぼうがだいじだ。いまに北風を負かしてやるから。」

お日様「ああ、ああ、いい氣持でねた。どれ、目をさまして、そろそろ暖い光を送るやうにするかな。」

南風「あつ、お日様がお目ざめになった。おい北風、おまへは、もう北の國へかへってしまへ。」

北風「なあに、まだおまへの出て来る時ではない。わたしは、もう一度おまへを追ひはらつて、野や山をまっ白にしてやるぞ。びゅうびゅう。びゅうびゅう。そうら、野や山が、また、雪でまっ白になった。」

南風「もう負けてゐるものか。南の國から、大勢の仲間をつれて来て、北風をどしどし追ひまくつてやらう。おおい、みんなおいでよう。」

南風の仲間大勢「何だ、何だ。」

南風「さあ、北風に負けないやうに、みんな力を合はせて、雪でも氷でも、かたはしからとかして、野や山を暖くじよう。」

南風の仲間大勢「よし、やらう。」

北風「大勢出て来たな。なあに、負けるものか。」

南風「暖い雨も降らせよう。草や木が、だんだんと芽を

ふいて、花のつぼみがふくらんで来るから。

南風の勢間大 さあ吹け、さあ吹け。

北風「これはたまらない。逃げよう、逃げよう。」

南風の勢間大 逃げた、逃げた。とうとう、北風もたまらなくなつ

たとみえる。これからはわれわれの世界だ。ば

んざいばんざい。

南風 北風が、雪や氷で、野山をまっ白にした代りに、

わたじは、赤い花や、みどりの若草で、野山をかざ

つて見せよう。

お日様 あはははは。

みんな 春が来た

春が来た

どこに来た。

山に来た

里に来た

野にも来た。

花が咲く

花が咲く

どこに咲く。

山に咲く

里に咲く、

野にも咲く。」

(三)

南風を追ひはらひます

南風を追ひたてます

北風をどしどしと追ひまくります

答へます

元氣をとりかへします

二十五 羽衣

(一)

じつと空を見あげます。

しをれたやうす。

羽衣をお返しいたしませう。」

では、こちらへいただきませう。」

「お待ちください。」

(二)

黒	み	月	そ	漁
い	ん	の	れ	夫
衣	な	都	を	は
の	そ	の	着	羽
そ	ろ	天	て	衣
ろ	っ	人	、	を
ひ	て	た	静	返
で	ま	ち	か	し
ま	ひ	は	に	ま
ふ	上	、	ま	す
と	手		ひ	。
、	。		ま	天
			す	人
			。	は

K130.8-5.1-4

二十五 羽衣

月	白	月
は	い	は
十	衣	ま
五	の	つ
夜	そ	黒
ま	ろ	や
ん	ひ	み
ま	で	の
る	ま	夜
い	ふ	。
。	と	
	、	

七十六

昭和十六年八月十六日 印刷
昭和十六年八月十八日 發行

(非賣品)

著作権所有

著作
者兼
發行
者

文
部
省

印刷者
大橋光吉
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所
共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

